

肥料の国産化率が高まる

ベトナムでは現在、急速な都市化や地価高騰を一因として農地面積が十分確保できず、酷使により土地の品質も低下している。人口当たり農地は0.1ha程度と、世界平均の10分の1以下である一方で、人口は年平均1.1%で増加しており、食糧安全保障は深刻な問題だ。先端技術導入などで効率を高める農業改革が求められているが、足下では肥料の国内需要が堅調に増加している。

肥料は有機肥料と化学肥料に大別できる。有機肥料の大半は農家自身で生産、消費されるが、近年では有機バイオ肥料（主に微生物肥料）として商品化され、2013年の需要量は約45万トンとなった。化学肥料では、窒素、リン、カリウムの肥料3要素を1つしか含まない「単肥」が多く利用されてきたが、養分が偏る、土壌外へ流出しやすい、特定の発育段階に効果が限られる、などのデメリットがあり、2要素以上を含む「複合肥料」の需要が増加している。2014年の国内市場は約1,100万トンで、単肥500万トン（窒素肥料22トン0、リン酸肥料180トン、カリ肥料96トン）、複合肥料580万トン（NPK400トン、DAP90トン、SA90トン）であった。

生産面では、主要15社のうち9社はベトナム国家化学グループ（Vinachem）、2社はペトロベトナムに属しており、内資が強い。全体的に見ると、国内需要の約7割以上を原料から国内調達できている貴重な業界と言え、窒素肥料（270万トン）、リン酸肥料（180万トン）、NPK（370万トン）は需要をほぼ満たしている。市場の3割以上を占めるNPKには外資も存在し、1995年設立のJapan Vietnam Fertilizer社（双日75%、Vinachem19%、セントラル硝子6%）が第4位で年間生産量35万トン、フランスのSCPA社は20万トンであった。最大手Lam Thao Fertilizers & Chemicals社が年間70万トンであることから、外資の存在感も大きいと言える。

国内生産ではなく輸入に頼っている肥料もある。DAPは投資効率の観点から輸入対応される傾向があり、生産企業はDinh Vu Fertilizer社のみであったが、2015年にDAP1社がLao Cai省で国内資源を利用し、年間33万トンを生産予定となった。また、カリウムが国内で調達できないのがネックであり、原料として多く用いるSAとカリ肥料は100%輸入であったが、VinachemがラオスのNonglom 鉱山で原料を発見、2013年には年間32万トンの採掘が許可された。肥料の国内調達率がさらに高まるだろう。

将来的に国内市場は徐々に先進国を追って肥料の効率使用へと向かう可能性があり、日本はこの面でも貢献すべきであるが、当面は市場の拡大が続くだろう。世界的にも底堅いことから輸出産業への転換が視野に入ってきてそうである。